



# 子どもたちの夢を紡いで

— 幼児期の学びのもつ

しなやかさとたくましさ乾杯！—

佐藤 暁子

はじめに

幼児期は、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期であり、家庭での親しい人間関係を軸にして営まれていた生活から、より広い世界に目を向け始め、生活の場、他者との関

係、興味や関心等が急激に拡がり「依存」から「独立」に向かいながら、自分の世界を創り出していく素晴らしい時期であると考えています。私は幼稚園教諭を自分の天職として、子どもたちとともに夢を紡いでいく幸せな日々を過ごすことができ、また、私生活では三児の母親、二児の祖母

として子育てに携わっていくことで、家庭のなかで子どもたちの素顔にも触れることができました。一人ひとりの顔や体型、性格が違うように、心の有り様も様々であるということを実感するとともに、家族に愛され、安定した情緒の下でいろいろな試行錯誤を繰り返しながら、自分の足で一歩一歩しっかりと歩きながら世界を拓げていくのだなということを実感しています。

また一方で、子どもを取り巻く大人たちの何気ない一言や、子どもの仕種がかわいくて思わず笑ってしまったこと等が、時には子どもたちのブライドを傷つけてしまい、気力や意欲を無くしてしまつて「やれない↓やらない」へ、「言えない↓言わない」へと変化していく姿に出会うこともあります。一人ひとりの子どもたちが「幼児期にふさわしい生活」を過ごしながら、素晴らしい自分の夢を紡いでいってくれるようにと願つてやみま

せん。今年で三十九回目の入園式を迎えようとしている今、私の出会った子どもたちとの日々を振り返りながら幼稚園教育の大切さについて語っていききたいと思います。

### 入園式の日にくお母さんからの独立

お母さんの手をギュッと握りしめ、神妙な顔つきで幼稚園の門をくぐり入園式にやってきたK君。いつも未就園児の園庭開放にやってくる時、とても元気で笑顔で挨拶をして遊びだすのに……緊張してるのかな？ お兄ちゃんもお姉ちゃんもこの幼稚園にいたので、毎日お母さんと一緒に歩いてきていたのに……。次の日、相変わらずお母さんの手をギュッと握りしめ、硬い表情でやってきました。「K君おはよう！ 元気に幼稚園にこれて良かったね！」握手をして出迎えると、片方の手だけはお母さんの手をつないだまま



で握手をし、なかなか離れられません。お母さんも先生もK君のことを「〇〇ちゃんの弟だから幼稚園に慣れている」と思い込んでいるようですが、Kちゃんにとって初めてお母さんと離れて幼稚園で過ごすことは、とても不安で勇気のいることだったのでしよう。お母さんが帰ったあとのK君は、どことなく不安そうに友達遊ぶ様子をじっと見ていました。降園後、早速先生たちで話し合い、登園時の子どもたちの様子によつては、無理にお母さんから子どもを引き離すのではなく、好きな遊びを見つれたり、先生と仲良しになつてきてお母さんを目で探さなくなつたら帰っていたかどうかということにしました。先生とお母さんに心のゆとりができ、お母さんも楽しそうにお部屋の隅で椅子に腰掛けて子どもたちの様子を見ていることで、子どもたちも安心

し、例年よりも早くみんなが元気に遊べるようになってきました。幼稚園に早く慣れるようにと不安定な子どもを無理に引き離すのではなく、子ども自身が楽しいことを見つけ、お母さんから独立していくことができるための「環境作り」こそが、保育者の務めではないでしょうか。

**A子先生だーいすき！ かわいいんだよ！**

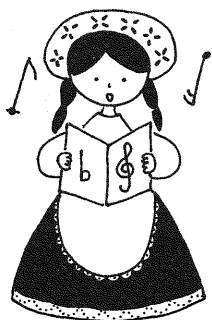
登園時、次々と元気にやってくる親子に挨拶をしていた私にT君のお母さんが「園長先生、聞いてください。昨日夕食の時に、うちのお姉ちゃんが『モーニング娘。』のことをかわいいねって話していたら、この子が急に泣きだして『A子先生のほうがかわいいもん』て猛抗議をするんですよ。そして『僕A子先生だーいすき！』ですって。ちょっと焼きもち焼いてしまいました」と嬉しそう

うに話してくれました。入園して間もなく、お母さんが帰ったあとの子どもたちは、きつと担任の先生の優しい笑顔や温かい手のぬくもり、そして絵本を読んだり歌を歌ったりしてくれる時の楽しそうな表情に、安心し、心が和らいでくるのでしよう。『幼稚園に喜んで通園し、生活のリズムに慣れて安心して遊びだす四月!』そのスタートの大切な時期に、保育者の醸し出す温かくて楽しい雰囲気、そして困った時にさり気なく助けられる優しさは、子どもたちにとって何にも変えがたい母親に代わる安心感もてる人的環境ではないのでしょうか。幼稚園での決まりやルールを身につけていくことは大切なことですが、その前に「幼稚園だーいすき! 先生だーいすき!」と子どもたちがお家で言える日が一日も早くくることを願っています。

### 家庭と連続した生活の中で拡がる

#### 子どもたちのネットワーク

入園して二週間ほどたち、幼稚園生活に慣れてきたころから本園では家庭訪問を実施しています。第一に、毎朝、お母さんと手をつなぎと登園してくる子どもたちが、どんな道のりを歩いて通園してくるのか。第二に、家庭での園児の様子や入園してからの様子などを伝え合いながら、園と家庭が互いに信頼感をもって幼児教育を進めてい





くため。そして何よりも、先生がお家に来てくれてお母さんと仲良しで話している姿を見て子どもが親近感をもつことなどを目的に実施しています。親子で二、三年間お喋りを楽しみながら、毎日通園する道を知るとともに、園として、交通安全全面や生活安全（不審者対策等）の配慮点などを調査し対策を立てていくことも必要です。また、初めての集団生活に親子共にまだ戸惑いをもっている、個人的に話したい保護者ともじっくり話すことができるまたとない機会です。園生活のなかでは見過ごされがちな小さな出来事にも、シッカリと聞く耳をもち、受け止めていくことで、保護者との信頼関係ができ、開かれた学級経営ができていくと考えます。そして何よりの収穫は、子どもたちにとつて、先生が我が家に来てくれることが、とても楽しみであり喜びであるということです。「先生が僕んちに来てくれたんだよ」「私のと

こにも来てくれたよ」次の日から、先生と子どもたちの関係が一步前進していることが感じられます。また、家庭との連続性、循環性のある生活のなかで、子どもたちは「面白そう！ 楽しそう！うれしかった！ 悲しかった！」等様々な感情体験をしていきます。帰り道に「今日ね、Mちゃんとお母さんごっこしたの、ごちそう作ったの」「あのね、ウサギさんに人參あげたんだよ。ぱくって食べたの」夢中になって話してくれる我が子のキラキラと輝く瞳に、園生活を楽しんでいることがきくと感じられることでしょう。次の日に人參やリンゴの皮を大切そうに持ってきてくれる親子の姿に、幼いなりに楽しいネットワークがつながってきていることを感じています。子どもたちの園での生活の様子や楽しいエピソードを園便りや学級便りで伝えていくことで、園と家庭との親近感が生まれ、家庭からのお便りを学級便りな

どにのせ交流していくことで、ネットワークが拡がり、つながっていき、子どもたちの生活にますます豊かな拡がりが見られていくのではないかと考えます。

### おわりに

中央教育審議会の答申に、「遊びの中で、遊びを通して学ぶ」幼児教育の重要性と、そのことが「後伸びする力となる」ことがいわれています。「たかが遊び、されど遊び」子どもたちが夢中になって遊ぶ姿のなかに、気づきが見られ、試行錯誤が見られ、工夫が見られ、そしてやり遂げた喜びや満足感が見られます。そのことが次への意欲となり、新たな学びの階段を自分の力で登り始めるのです。教科書や楽譜を通して学ぶのではなく初めての集団生活のなかで沢山の人やもの、出来事と出会いながら、夢中になって取り組み様々な

体験を繰り返しながら、身につけていくのです。初めてお母さんと入園式に参加したあの日から、子どもたちは毎日の生活のなかで「ドキドキ体験、ワクワク体験、ハラハラ体験」を繰り返しながら、心豊かにたくましく成長していきます。そしてしなやかさとたくましさを身につけながら実際に多くのことを吸収していきます。私たち保育者も、子どもたちに負けないバイタリティーと保育者としてのスペシャリティーに磨きをかけ、子どもたちの「先生だーいすき!」「先生すごーい!」の言葉に励まされながら、子どもたちの素晴らしい明日に向けて研修を深めていくことが大切です。そして、幼児期の学びの素晴らしさに誇りをもち、子どもの姿を通して幼児教育の重要性を伝えていけるように努力してまいります。

(新宿区立愛日幼稚園)